

松 山 大 学 論 集
第 31 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 9 年 10 月 発 行

早期完了型アイデンティティに関する
研究の動向と展望

熊 野 み き

早期完了型アイデンティティに関する 研究の動向と展望

熊 野 み き

本論では、これまでのアイデンティティ研究の中から早期完了型アイデンティティに関わる研究を取り上げ概観し、まとめとして動向と展望について述べた。早期完了についての数量的検討では、早期完了概念が提出された当初から言及されている、権威主義的や硬さなどの特徴がその後の研究でも一貫して示されている。一方で、面接や事例を通じた検討においては、早期完了の適応的・肯定的な面と、数量的な示唆をより推し進めた内的な理解の可能性と必要性とが示されている。早期完了に焦点を当てた研究自体が少なく、今後数量的・質的両面からのさらなる検討が重ねられることが求められる。

1. アイデンティティ・ステイタスという考え方

アイデンティティ研究という大きな流れの中で、Marcia (1966) によるアイデンティティ・ステイタスというパラダイムの導入は、それまでのアイデンティティ概念そのものに関する研究から大きな飛躍を遂げるきっかけとなった。アイデンティティを、達成-未達成の直線的なプロセスで捉えるのではなく、アイデンティティ形成の様々なあり様や形成途中の状態像という視点が提供され、理論的な研究のみならず、実際の人間のあり様ともより重なる形で、アイデンティティ概念が活かされることになったと考えられる。

Marcia (1966) の提唱したアイデンティティ・ステイタスとは、アイデンティティ形成のプロセスを、commitment (以下、コミットメントとする。他の訳に、自己投入、積極的関与、傾倒などがある) と crisis (以下、危機とする) と

Table 1. Marcia のアイデンティティ・ステイタス

アイデンティティ・ステイタス	危機	コミットメント	概 略
同一性達成 (Identity Achievement)	経験した	している	幼児期からのあり方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (Moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (Foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的。
同一性拡散 (Identity Diffusion)	経験していない	していない	危機前 (pre-crisis) : 今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像すること不可能。
	経験した	していない	危機後 (post-crisis) : 全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。

(無藤 (1979) より引用し、本論文の表記に統一するために用語の一部を改変した)

いう、アイデンティティ達成への対処の仕方2点の有無により分類するものである (Table 1)。ステイタスの判定に際しては、職業、宗教、政治の3つの領域における対象者のコミットメントと危機のあり様を、半構造化面接により明らかにする。

まず、コミットメントと危機の両方が高い状態は、達成 (identity achievement) とされる。Marcia (1966) によると、意思決定の時期である危機を体験後、一定の職業やイデオロギーを自らの意思で選択し、それに積極的に関与している状態とされる。自らの選択について、やり遂げることができ、何らかの急変や予期せぬ事態が生じて、対応し処理していくことができる。対人関係においても、安定した関係を維持していると記述されている。

次に、危機を現在経験中で、コミットメントはまだ曖昧な状態が、モラトリ

アム (moratorium) とされる。危機を経験中ということは、意思決定をしようとして模索をしているということであり、その姿としては、一生懸命に努力し、奮闘していることが特徴である。多くの低学年層の大学生が該当すると考えられるステータスである。

なお、後に下位分類が想定され、自発的・能動的なコミットメントをしようとしている状態が積極的モラトリアム、反対に、コミットメントへの希求が薄い、もしくはあまり認められない状態が消極的モラトリアムとされる。積極的モラトリアムは、達成に向かっていくアイデンティティ形成の途中の状態として捉えられることが多いが、消極的モラトリアムは、危機を乗り越えられなかった場合に、後に述べるアイデンティティ拡散につながっていくとされる。

3つめのステータスとして、コミットメントは高いが、危機が明確には認められない状態が、早期完了 (foreclosure) とされ、両親や家の伝統的価値観を引継ぎ、権威的な対象に従順な態度を取りやすく、自己内省による危機を体験せずとも進路や仕事に没頭できる状態像として描かれている。Marcia (1966) では、「自分の目標と親の目標との間に不協和がない」、「すべての体験が幼児期以来の自分の信念を補強するだけになっている」、「見せかけの自信のために、一見、達成型と同じように見える」といった記述がされており、表面的な適応は達成ステータスと同じくらい高く保たれていると考えられる。一方で、「パーソナリティにある種の硬さがあるのが特徴的である。もし彼が両親の価値観が通用しない状況に置かれたならば、極度に脅かされるだろうと思われる」とも言及されており、表面的な適応が維持できなくなった時に、拡散状態が引き起こされることも十分考えられる。ステータスの分類基準からしても、早期完了は、危機の体験のなさが拡散ステータスと類似した点であり、4つのステータスを二分してとらえる際には、より健康度が高いステータスが達成とモラトリアム、低いステータスが早期完了と拡散、と扱われることが多い。

最後に、コミットメントは認められず、危機もない、もしくは過去に経験したがうまく乗り越えられなかった場合の状態を、拡散 (identity diffusion) とい

う。Table 1 に示したように、危機の経験の有無によって、2つの下位分類がある。危機前 (pre-crisis) 拡散は、今まで自分が本当に何者かであった経験がないため、何者かである自分を想像することができないとされ、その背景には、両親のモデルとしての機能不全と、放任的な育児態度があるとされる (Marcia, 1966)。もう一方は、危機後 (post-crisis) 拡散で、Marcia (1966) は、「積極的関与をしないことに積極的関与している」と記述している。過去において危機を乗り越えることができず、類似した意思決定の場面を避けようとする結果、すべてのことが可能であり、可能なままにしておかねばならない、といった心境に至ると考えられる。

2. アイデンティティ・ステイタス研究における早期完了の特徴

アイデンティティ・ステイタス論が提唱されて以降、当初はステイタスをタイプとして理解し、それぞれのステイタスの精緻化や実際の青年像との照合などが進められた。しかし、しばらくすると、ステイタスはアイデンティティ発達プロセスの途中経過の状態像として理解すべきものであるという捉え方が主流となり、時系列的なステイタスの移行や変化、より内面的な特徴の理解も着目されるようになってきた。

現時点までに行われている早期完了に関する研究を概観するが、これまでに膨大な数の研究が国内外で積み重ねられているため、今回は、1981年から1996年までの研究を整理した鑑・山本・宮下 (1984)、鑑・宮下・岡本 (1995a, b)、鑑・宮下・岡本 (1997)、鑑・岡本・宮下 (2002) を参考にした。まずは主にアイデンティティ・ステイタスに関する研究の中で、ステイタスの一つとして早期完了の特徴について述べられていることをまとめる。

早期完了の特徴として、他のステイタスとの比較から描かれた特徴に、以下のような状態像が挙げられる。まず、複数の研究において最も一貫して示されている特徴として、権威主義的ということがある。これに付随して、社会的是認への欲求が高い、自己主張的な態度が少ない、同調行動が多い、両親と良好

な関係を築いている、心理的離乳の解決が不十分、依存欲求が高い、依存的な意思決定のスタイルを持つ、といった特徴も、様々な研究の結果示されている。両親をはじめとする自分の周囲にいる大人の動向を気にし、時にはそれに依存したり委ねたりする態度も認められる。その背景には、特に親子関係の文脈においては、心理的な自立の未成熟さが示唆されるものと考えられる。立ち返ると、Marcia (1966) においても早期完了の特徴として、権威的な存在への従順さや両親の価値観を引き継ぐ傾向について触れられており、早期完了の状態像として、当初から指摘されている傾向が、その後も改めて確認されたと言える。

また、権威主義的ということと関連があるが、統制の外在化も他のステータスに比べて高く、基準や規範など外から与えられる枠組みに従いやすい、またそういった枠組みを強く求める思考傾向や判断の仕方といった特徴も見いだされている。自ら考えて決定する、という内省を伴う自律の面の未熟さとともに、分析力や深い考察力に乏しいことも、これに関連する特徴と考えられる。

こうした特徴があると、単純に考えると、自己評価が低くなることが予想されるが、過去の研究では、自尊心は高く、不安は低いといった結果も複数の研究で得られている。自己に対する関心が乏しいという結果も散見されることから、権威主義的で周りの基準で思考・判断しているにも関わらず、そのことへの内省に乏しく、自己評価が高い水準で保たれているという点が、早期完了の一応の適応状態につながっており、臨床場面では取り上げられる対象となりにくい要因と推測される。ある意味で、早期完了の青年たちの健康的な部分とも捉えられるが、青年期の時点では問題に直面せずに、適応的に過ごしていったとしても、進路決定などの人生に関わる事柄については、その検討・決定過程での不十分さが、何らかの形でその後の人生において向き合わざるを得ない課題として立ち現れるのではないだろうか。

他に、過去の研究から示されている早期完了の特徴に、衝動的である、つまり、素早く反応をするが誤りが多い、ということも挙げられる。自らの行動の価値判断が、内容的な面よりも、外から見て分かりやすい早さであったり形を

繕うことであったりすることが考えられる。その結果、物事への反応においては、熟考して動くよりも素早く、衝動的に動くことが優先されやすいのではないだろうか。また、形式を重んじるという点で共通すると考えられるが、物事への取り組み方としては、目標や達成を志向する未来志向的という特徴も報告されている。これらの特徴は、決してネガティブな面だけではなく、早期完了の青年たちの健康的・適応的な面にもつながっていると考えられる。日常生活の中では、いつも自己を投入し、熟考して決めることばかりが求められるわけではないだろう。特に情報化が進む中で、次々と与えられる情報を処理していく上では、とにかくやって前に進めること、原因追求ではなく、未来志向で物事に取り組んでいくことが、周りから求められ、かつ当の本人たちにとっても過ごしやすい取り組み方であるという面もあると考えられる。

最後に、対人関係の特徴については、早期完了の青年たちは、ステレオタイプの的で表面的、つまり、友人関係においても恋愛関係においても、浅く短い関係性を志向していることが示されている。自己内省力の乏しさとも関連するが、他者との関わりにおいても、相手や関係に深く入り込むことを好まない傾向を持つことが推測される。現代特有の SNS 等を通じた他者とのつながり方は、まさに浅く短くという特徴を併せ持っており、早期完了の青年にとっては、適応しやすい環境であるとも考えられる。

3. 本邦におけるアイデンティティ・ステイタス研究

本邦における初期のアイデンティティ・ステイタス研究の代表的なものとして、無藤（1979）による Marica（1966）のアイデンティティ・ステイタス面接の検討が挙げられる。無藤（1979）は、アイデンティティ・ステイタス面接を日本人向けに改良する中で、宗教の領域を価値観の領域に修正し、「影響を受けた人」や「生きていく上でこれだけはしていきたい、自分にとってこういうことが一番大切だ」という質問項目を設けた。また、ステイタスの評定の仕方にも修正を加え、原法よりも明確に判断・決定できるようにしている。

早期完了に言及された箇所では、「今後も要領よく生きていこうと予想された点が印象的」とある。典型的な早期完了像である両親の価値観の継承や硬さがない、もしくはそれらが目立たないが、達成の状態像とは異なる点の記述であり、昨今の青年像とも重なる部分があると考えられる。なお、大学選択の動機とステイタスとの関連を見た結果では、早期完了が達成よりも権威主義的であり、主体的でないことが統計的に示されている。上述した過去のアイデンティティ・ステイタス研究と一致する結果が得られている。

加藤（1983）は、Marcia（1996）のアイデンティティ・ステイタス面接を質問紙形式に発展させ、自我同一性地位判定尺度を作成している。「現在の自己投入」と「過去の危機」、現在の危機を捉えるための「将来の自己投入の希求」という3変数が設定された。尺度は、12項目、6件法で構成され、3変数の得点から次の6つのステイタスに分類される。分類のプロセスをFigure 1に示す。

Figure 1 に示した順で上から、同一性達成型は、高い水準の危機を経験し、その上で現在高い水準のコミットメントを行っている者、達成-早期完了（A-

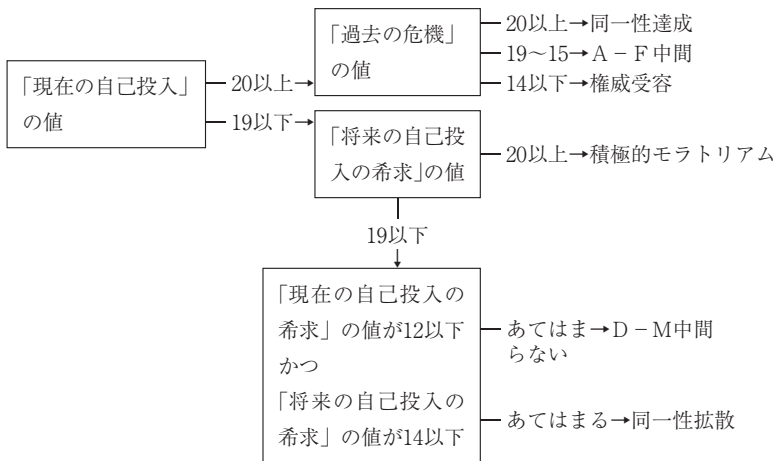


Figure 1. 各ステイタスへの分類の流れ図

（加藤（1983）より引用し、本論文の表記に統一するために用語の一部を改変した）

F) 中間型は、中程度の水準の危機を経験し、現在高い水準のコミットメントを行っている者、権威受容（早期完了）型は、低い水準の危機しか経験していないものの、現在高い水準のコミットメントを行っている者、積極的モラトリアム型は、現在は高い水準のコミットメントは行っていないが、将来のコミットメントを強く求めている者、同一性拡散-積極的モラトリアム（D-M）中間型は、中程度の水準のコミットメントを現在行っており、将来のコミットメントの希求が、積極的モラトリアム型よりは低い者、同一性拡散型は、低い水準のコミットメントしか行っておらず将来のコミットメントへの希求も弱い者、とされる。Figure 1中の基準となる得点によって、フローチャート式に分類される。なお、加藤（1983）では、作成した尺度を用いて、大学生におけるステイタスの分布を把握している。

国外においても同様の尺度化の流れが認められる。Marcia（1966）の開発したアイデンティティ・ステイタス面接は、数量的な研究の面では、多くの対象者に実施するのが困難であったり、明確で客観的な判定が難しかったりするという難点があり、次第に質問紙化が進められた。加藤（1983）以前にも類似した取り組みはあったが、現在最も利用されることが多いのは、この自我同一性地位判定尺度である。この尺度の開発により、各ステイタスの比較・検討などがより簡便になり、またたくさんの対象者からデータを収集して検討を行うことができるようになった。

4. 早期完了のみに焦点があてられた研究

早期完了については、ここまで述べてきたようにアイデンティティ・ステイタス研究の中で、他のステイタスとの比較を通してその特徴が述べられることが多いが、数は少ないものの、早期完了のみに焦点を当て、より詳細に検討しようとした研究もある。ここからは、主に本邦におけるそれらの研究をレビューし、早期完了についての考察の深まりを見ていくことにする。

まず、北村（1983）が、この研究領域の流れの中では比較的早い段階で早期

完了に着目している。問題意識が1980年代の社会状況やその中の青年像に端を発しているため、35年以上経った現代のあり様と一致することばかりではないが、現代に見られる特徴にも通じる部分があると考えられる。例えば、当時の青年たちを早期完了という観点から理解することの可能性を示唆した部分で、「主体的に適応しているのではなく、諦めや無力感、自嘲等によって、真の自己決定と格闘することなしに消極的に流れに従っているだけのようなのである」、「危機の中にいるはずなのだが、実際にそこに足を踏み入れ、直面し対決することを無意識的に避け、日常のはかない満足の中に逃避し、危機（人生の分岐点）を経験することなく成長してゆく」とある。ここから想像される青年像は、現代の青年像とも重なる部分があるのではないだろうか。筆者も学生相談等の場面で、周りの情報や意見に流され、「消極的に流れに従って」自らの進路やその他の重要な事項を決定しているように思えてならない青年たちと出会うことは少なくない。そう考えるに至った経緯を尋ねても、「流れで」や「なんとなく」という一言しか発せられず、聴き手として納得のできるような説明を聴くことはできない。一方で、そうした青年の多くは、自分の置かれた現状にも、消極的にでも選ぼうとしている将来像にも、大きな不満は感じていないようにも見える。すでに決まったもの、決められたものとして、受け入れる・従うという態勢しかなく、内的に存在しているはずの疑問や違和感には、全くと言ってよいほど目が向けられていないように感じる。

北村（1983）では、社会状況と早期完了的なあり方を関連付けながら論を進め、Marciaが示した両親の価値観を引き継ぐというあり方ではなく、「親の価値観と矛盾しないばかりか、広く社会に行き渡っている価値観とも葛藤を生じることがない」、「社会のもつ価値観にたやすく同一化した早期完了」と記述している。この状態に至るには、「本来の自己と環境に対決することなく、危機らしいものを抑圧し、経てこないままに傾倒が達成される」というコミットメントと危機の体験のされ方があるとされる。

このように1980年代当時の社会や青年のあり方から早期完了像について描

いた上で、それまでの早期完了に関する研究において、Marciaが当初述べていた早期完了像とは異なる状態像が示されてきたことに対し、2つの早期完了像の存在を仮説的に示している。従来型の早期完了は「硬い Foreclosure」と命名され、両親の影響が大きいことや硬さが特徴的であり、防衛的な印象を持つ早期完了とされる。一方で、「柔軟な Foreclosure」と命名されたのが、北村(1983)が述べてきた、一見適応的に見える「自前ではない、同調的な価値や生き方にコミットしている」早期完了である。それぞれについて、典型事例の面接調査の概要を1名分ずつ提示し、その違いを考察している。北村(1983)の研究は、本邦における早期完了の状態像について、詳細に検討をしていくことの必要性を示した点で評価される。

同じく1980年代に早期完了に焦点を当てた杉原(1988)では、さらに事例を詳しく検討することにより、早期完了の青年の深層に迫ろうとしている。それまで、アイデンティティ・ステータス研究は数量的な研究が大半であったことに対し、杉原(1988)は事例研究をはじめとする個性記述的な研究の必要性を述べている。青年一般の傾向を捉えることだけではなく、事例的に様相についてより詳細に検討し、対象の人々の深層を明らかにする方向で研究が深められていくことは、研究成果を実際の青年支援や対応に活かす上で非常に有用なものになると考えられる。

杉原(1988)は、質問紙による予備調査の結果早期完了の典型と考えられた1名の青年に対して、無藤(1979)の自我同一性地位面接と清水・今栄(1981)の特性不安尺度、ロールシャッハ・テスト、面接調査(家族関係、友人関係、自己像などを、対象者の自発性に関与しながら聴取)を行っている。ロールシャッハ・テストでは、潜在的な同一性拡散傾向が認められるとし、ステータス論における拡散と早期完了との類似性を支持するとともに、拡散状態への防衛としての早期完了的あり方という新しい視点を提示している。また、「非常に漠然としたイデオロギーでも安定できるために危機を経験していない」と、北村(1983)と同様の言及をしている。早期完了像の明確化を推し進めると

もに、青年期平穩説のような早期完了＝健康的な青年といった見方に対して、「そのような見方はあまりにも浅薄で一面的なものと言わねばならない」と、早期完了の青年に対するより深い理解が必要であると警鐘を鳴らしている。一見適応的に見えるからといって、問題がない青年ばかりではない。表面的な適応の良さの背後にある、内面に潜在する葛藤や危機体験につながる課題の存在に気づき、理解や支援をしていくことが重要になると考えられる。

北村（1983）、杉原（1988）と同様の発想から早期完了に焦点を当て、数量的アプローチを用いて検討したものに、岡田（1993、1995）がある。それまでの早期完了に関する研究をレビューし、権威主義的志向、両親の価値観の継承、硬さといった従来指摘されてきた特徴を持つ青年だけではなく、要領がいい、未来志向、社会の一般的価値観への馴染みやすさなどの特徴を持つ平均的な青年も、早期完了に含まれるのではないかとの問題提起をした上で、早期完了青年像を明確化することを目指して、質問紙調査を行っている。作成した早期完了特徴項目から見出された「硬さ・一貫性」と「両親への従順さ」の2主成分は、早期完了ステイタスにおいて他のステイタスと比べてどちらも高得点であった。この結果から、早期完了ステイタスの青年らは、進路選択や信念についての硬さと一貫性を持つと同時に、両親の規範や価値観を継承する側面も併せ持つ、つまり、Marcia（1966）の示した古典的な早期完了青年像と一致すると結論付けている。

また、達成ステイタスとの区別について、達成ステイタスの特徴である一貫したコミットメントと、早期完了ステイタスの硬い信念との分離が不十分であったとしている。岡田（1995）では、早期完了の特徴である信念の硬さは、ステイタス判定における「傾倒の高さの反映」とされている。一つの結論に対する取り組み方としては、達成の青年も早期完了の青年もコミットメント有りと見なされるが、そのあり様において、達成と早期完了との区別が可能になることが考えられる。達成ステイタスのもつ社会的にも是認される適応的な一貫性と、早期完了ステイタスの硬さとは、単に一貫性や硬さの程度の差ではなく、

その思考や決定に至るプロセスに注目することで、違いを明確にできるのではないだろうか。その「硬さ」の質的な差異については、考えや志向の内容を尋ねるだけでは明確にならず、柔軟な理解や対応が必要とされるような場面への反応の仕方など、考えや志向の変化のあり方や幅、コミットメントのあり様といった面に注目することで、明らかにしていくことが可能になると考えられる。

なお、岡田(1993)では、職業決定に関する尺度との関連も検討されており、早期完了の特徴として、他のステイタスと比べて、その時点での「職業決定」が高く、「職業模索」が低いことが示された。このことより、上述したプロセスの観点では、模索なき決定とも言える早期完了ステイタスの進路選択の特徴が見出されたと捉えることができる。これに関連して、深瀬・荒井(2012)では、フリーターに対する肯定的態度の一つ「プロセスとしての受容」において、達成ステイタスよりも早期完了ステイタスにおいて得点が有意に低いことが示されている。「目標にたどり着くための試行錯誤の時期」というフリーターへの見方を、早期完了ステイタスの青年らは持ちづらいことが示唆されている。職業決定や進路選択における模索の意味を重視しない早期完了ステイタスの特徴の表れであると考えられる。

また、トップアスリートという特殊な対象者への調査の結果ではあるが、平山(2013)では、重要な他者である指導者などの影響を受けた意思決定での進路選択が早期完了型アイデンティティを高めることが報告されている。自らの進路を、重要な存在であるとはいえ、他者の意見を取り込み、内省を深めることなく決定するというあり方は、模索を重視しないあり方としても捉えることができる。こうした青年像は、昨今の青年の進路選択に見られる、安易な進路決定や志望先の決定とも重なるのではないだろうか。

最近の研究では、早期完了ステイタスの青年の肯定的な側面に光を当てたものもある。西田・沖林・大石(2011)では、早期完了ステイタスの青年らが、「ありのままの自分を受け入れる」や「独立的に行動する」、「状況を利用して自分の能力を活かす」といった意識を高く持っており、達成ステイタスよりも

適応的と見なされる可能性に言及している。これは、従来の早期完了ステイタス像とは異なる記述であり、内省的な自己体験からどの程度アイデンティティ感覚を成熟させているかは別にして、結果として適応的な行動をとることができるという、早期完了ステイタスの健康的な側面を描き出していると考えられる。

上述した平山（2013）の研究も、特定の対象者に限れば、肯定的な見方も可能となる。国外の研究ではあるが、平山（2013）と同様にスポーツ選手（競技者を目指す大学生）を対象に調査を行った Good et al.(1993) では、競技者を目指す大学生においては、早期完了得点が競技者アイデンティティ得点と比例して高くなること、そして、一度コミットした競技者アイデンティティは在学中には変化しない、つまり早期完了の特徴も高く保たれたままであることが示されている。スポーツ選手や芸術家など、幼少期などの早期から一つのことに打ち込み、継続し、青年期・成人期に仕事としていくこともある領域においては、一般的に言う早期完了の傾向が認められることが多く、それが不適応ではなく、むしろ適応の方向に寄与していることも考えられる。早期完了自体の捉え方の問題もはらんでいるが、数量的には早期完了とされる対象者の青年期のあり様やその前後を含めた歩みを詳細に検討していくこともまた、特定の対象者の理解という範疇を越え、一般青年への理解にも通ずる部分もあるのではないだろうか。

ごく最近の研究では、早期完了の数量的な捉え方に関して、吉中(2016)が、同一性地位判定尺度（加藤，1983）によるアイデンティティ・ステイタス分類の妥当性について、今一度検討をしている。これまでの問題点として、ステイタスの分布の偏りが大きいことが挙げられているが、特に早期完了ステイタスは、加藤（1983）の時点でも4%にとどまり、その後のこの尺度が用いられた研究においても、該当者は概ね少ないとされる。吉中（2016）は、原法の分類手順が、まずコミットメントの得点を用いた判定からであることに着目し、理論的なアイデンティティ発達のプロセスからも、先に危機の有無から対象者を

分類していくことを提案している。質問紙調査の結果、原法通りの手順では早期完了ステイタスに該当した対象者は、151名中2名(1.4%)と非常に少なく、進路成熟に関する尺度との関連から、理論的には早期完了ステイタスに該当するであろう特徴を持つ群（自律度と関心度は低く、計画度だけが高い）が、拡散-モラトリウム中間地位に分類されていることが示唆された。この研究は、早期完了ステイタスについて検討を進めていく上で、そもそも早期完了ステイタスに該当する青年群を見出す手順に問題があるのではないかという根本的な指摘をしている点で、非常に興味深い。北村（1983）や杉原（1988）が言及した早期完了像を数量的に捉えるためにも、尺度そのものや判定基準の見直しなど、今後も改善を目指していくことが必要であると考えられる。

以上のように、早期完了のみに焦点が当てられた研究においては、数量的なアプローチでは、Marcia（1966）が示した状態像が支持されているが、実際の青年像からの事例的なアプローチでは、多様なあり方や内面と外面のずれの大きさが指摘されている。社会状況の変化によっても、早期完了の状態像のあり方や早期完了的なあり方への評価は変わってくると考えられ、今後も継続的な検討が求められる。

5. 早期完了の状態を示す青年への心理臨床的支援について

杉原（2001）では、学生相談の一事例を検討することから、早期完了やアイデンティティ発達上の問題、そうした状態の青年への支援のあり方について考察を深めている。相談場面等での青年理解へのアイデンティティ論の有効性が検討される場合には、何らかの問題を抱えていることが多い拡散やモラトリウムが取り上げられることが多く、一見適応的であり、相談場面に現れにくい早期完了についての知見は乏しい。早期完了の状態像の一応の記述はなされているものの、実際の青年のあり方を説明する概念としての有効性が必ずしも立証されていないとも言える。その点で、杉原（2001）の研究は、早期完了青年の実態に臨床的な視点から迫ろうとした貴重な知見である。

事例として取り上げられた青年は、学業的に優秀であるが、限定的な恐怖症の症状を持ち、学生相談機関に来談した過剰適応的な男子大学生である。相談開始当初、早期完了的な特徴を示していたこの青年に対し、カウンセラーである筆者は、表面的な適応のよさに目を奪われ、早い段階で面接終了を提案している。その提案は受け入れられず、その後も面接は続くことになるのだが、早期完了の青年が示す外的な適応のよさは、専門家である学生相談のカウンセラーが面接の終了を提案するほどに、健全さを感じさせるものであることがここから読み取れる。早期完了青年の外的適応を保つ力、それは拡散状態への防衛でもあるのかもしれないが、社会の中で生きていくためには、有効に働く場合もあると考えられる。早期完了青年の未熟な部分に焦点を当てるとともに、彼らの持つ力にも光を当てることが、ひいては青年一般の理解や支援にも役立つものと考えられる。

面接の経過に戻ると、次のような青年の変化が記述されている。面接を重ねる中で、「いつも不安に駆り立てられてきた自分の体験を少し距離をおいて眺め検討」できるようになり、その不安を面接の場で実感を伴って表現されるようになっていった。並行して、親子関係に物理的な変化が生じ、それを契機にそれまでの親子関係の捉え直し、親からの期待への言及とそれらへの重荷との認識を表明し、「親への過剰な同一化を対象化して認識」できるようにもなっていった。一度終結を迎え、半年後の再来談以降は、より自身の「内的なものの表出が活発に」なり、同時にそうした変化への肯定的な受け止めが見られている。なお、現実的には、大学卒業と就職を無事に迎え、卒業と同時に相談も終結となっている。経過の考察においては、この青年の変化をアイデンティティ発達の文脈で捉え、早期完了からモラトリアムへという見方がなされている。親子関係の変化においても、職業決定のプロセスにおいても、青年自身の感覚に基づき判断・決定をしていく姿が記述されている。

上記のような早期完了からモラトリアムへの変化を促進した要因としては、まず、親への「同一化を継続させている要因について理解し、その要因の作用

を弱める介入」が挙げられている。この事例においては、表面的な適応の中にある不安(「親との同一化から距離を取り自律的に機能することをめぐる不安」)を丁寧に取り上げ、支持的・励ましの関わりを続けている。例えば、青年の「感じていることの正当性を前提にして聴いていく」という記述があるが、わずかに語られる主体性を伴う語りや本心をカウンセラーが取りこぼさず支持的に返すことで、青年が自らの思いに安心して接近できるのではないだろうか。

もう一つの変化促進の要因として、「一面的なものの見方において切り捨てられているものへの焦点づけ」が挙げられている。この「一面的なものの見方」は、早期完了の特徴である「硬さ」に通ずるものであり、様々な見方や価値観にじっくり触れ、主体的に選び取る作業が、早期完了青年においてはなされにくいと考えられる。面接では、ものの見方の一面性が目立った時に、カウンセラーは「違和感を感じながら注目」し、また青年が様々な見方や価値観を取り込んでいく過程を見守り続けた。そうした中で、青年の「ものの見方、感じ方の懐が広がり、平板さが減って陰影がついてきた印象」が強くなっていったと考えられる。

以上のように、早期完了青年へのアプローチの実際からは、早期完了像の具体化とともに、より適応的な状態に至るために有効な理解や支援の仕方が記述されている。

6. 早期完了研究における今後の発展可能性と課題

ここまで、アイデンティティ・ステイタス研究における早期完了への言及や、早期完了のみに焦点を当てた研究を概観してきた。現時点までに明らかにされてきたことを踏まえ、今後のこの領域における研究の発展可能性と課題について述べる。

まず、早期完了についての研究の数自体が、アイデンティティ・ステイタス研究に付随するものを除くと極端に少なく、そもそも焦点化されることが少なかったと考えられる。その背景には、ここまで述べてきたように、理論的には

アイデンティティ拡散と同じグループとされるほど達成には遠い状態像とされながらも、表面的な適応が保たれていることから、青年期の問題として注目されることが少なかったことが推測される。しかし、杉原（2001）で早期完了的特徴を持つ青年との学生相談における面接過程が示されているように、問題がないように見えるだけで、多くの場合内的には未成熟な状態であり、彼らへの理解を深め、支援のあり方を探っていくことは有用であると考えられる。学生相談などの場には、自ら問題意識を持って来談するケースもあることが推測され、杉原（2001）のような事例研究が重ねられることで、より内面的な部分の理解が深まっていくことが期待される。

筆者自身の経験からも、学生相談の場面などで出会う青年の特徴を考えた時に、アイデンティティ論に即せば、早期完了に近い特徴を持っているだろうと思われることや、早期完了の特徴に当てはめて考えた時に、その青年の理解が深まることもあった。特に、昨今の先行きが不透明な社会の中で、自らの進路を決定していくプロセスにおいて、権威主義的ではなくとも、“大手企業”、“有名企業”ということだけで志望先を決めたり、両親をはじめとする家族や大学の教職員らからの一言で、青年自身がしっかりと悩むことをせず進路を選択したり、といった姿を目にすることは少なくない。早期完了について、改めてその状態像を現代青年に即した形で明確化することは、学生相談等での青年理解と支援、ひいては大学教育においても有益なものと考えられる。

また、数量的な研究で明らかにされてきた早期完了の特徴についても、今後のさらなる検討・研究が待たれるところが多い。例えば、岡田（1995）で言及された数量的に見いだされた早期完了と、経験的に記述される早期完了像とのズレを小さくしていくためには、より内面的な特徴を反映させた尺度等の作成も期待される。尺度を用いての判別にはそもそも限界があるかもしれないが、現在使用されている尺度に改良を加えていく余地はまだあるのではないだろうか。同時に、吉中（2016）が指摘したような、ステータスの分類基準や手順にも見直す余地が残されている。コミットメントと危機という2つの観点だけで

よいのか、またそれらの観点をどの順で基準とするのか、基準の程度をどこに設定するのか、など細かい点にはなるが、検討を進めていくこともこの領域の研究を推し進めることにつながると考えられる。

本論の後半で触れたが、早期完了のあり様の中には、肯定的・健康的な特徴として捉えられる部分も存在する。まずは、肯定的・否定的、健康的・不適応的な面の整理が必要であるが、その整理を通じて、早期完了の特徴が改めて描かれることになるのではないだろうか。

最後に、青年期に限らず、成人期以降の発達を考えた時に、青年期を早期完了の特徴を持って過ごした人が、その後も果たして適応を保ったままであったのか、それとも、その後の人生のどこかで青年期的なアイデンティティの課題と向き合うこととなり、その体験を通じて、達成的なあり方に移行していったのか、長いスパンでの適応も明らかにされることが期待される。スポーツ選手や芸術家など、として触れたが、一芸に秀で、しかもそれを仕事として生きていく人たちも存在する。かなり古くはなるが、日本も近代化を迎える前までは、家業的な志向が強く、子どもが自らの意思と関係なく家業を継ぐことも多かった時代もあった。その時代の成人のほとんどが早期完了だったと考えられるのか、早期完了的なあり方が、成人期にどのような適応や安定に変化していったのか、興味深いところである。

これまで早期完了はあまり注目されてこなかった印象があるが、ここまで述べてきたように、現代の青年像と重ねた時に、青年の心理面への理解の深まりを提供してくれる概念と捉えることもできる。まずは、現代の青年のあり様を理解するための視点の一つとして、早期完了に改めて光が当てられ、その概念自体について、またその状態にある青年らへの理解や支援について、知見が重ねられることが期待される。

引用文献

- 深瀬裕子・荒井佐和子 (2012). 大学生の就業意識とアイデンティティ・ステイタス 広島大学心理学研究, 12, 85-91.
- Good, A. J., Brewer, B. W., Petitpas, A. J., Van Raalte, J. L., and Mahar, M. T. (1993). Identity foreclosure, athletic identity, and college sport participation. *The Academic Athletic Journal, Spring*, 1-12.
- 平山健三 (2013). トップアスリートの大学進学プロセス及び学生生活と早期完了型アイデンティティについての実証的研究——ラグビー・トップリーグの選手を対象として——日本体育学会大会予稿集, 64, 123.
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 北村秀哉 (1983). 現代日本における自我同一性形成の特質——早期完了群の再検討を手掛かりとして——東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 6, 143-151.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3(5), 551-558.
- 無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27(3), 178-187.
- 西田若葉・沖林洋平・大石英史 (2012). 大学生の多元的アイデンティティと適応機能との関連 山口大学教育学部研究論叢 (第3部), 61, 81-92.
- 岡田努 (1993). 自我同一性早期完了地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 35(1), 57-68.
- 岡田努 (1995). 自我同一性早期完了地位についての一考察(2)——学部間比較を中心として——新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 36(2), 219-228.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 杉原保史 (1988). 自我同一性地位における早期完了型について——一事例に基づく考察——心理臨床学研究, 5(2), 33-42.
- 杉原保史 (2001). 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, 19(3), 266-277.
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1995a). アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1995b). アイデンティティ研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1997). アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (2002). アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・山本力・宮下一博 (1984). アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- 吉中淳 (2016). 大学生における自我同一性地位と進路成熟態度の関連 弘前大学教育学部紀要, 116, 67-75.